

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2020年02月

進化論の人生設計
(③ネガティブ本能と日本人)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com



ピカイチ先生

ピカイチ生活経営塾

検索

【復習】 「閉じた空間」と「開いた空間」

ネガティブゲーム

ポジティブゲーム

	閉じた空間 (政治空間)	開いた空間 (貨幣空間)
境界の出入り	原則禁止(鎖国)	自由(自由交易)
社会の構造	タテ型(結束重視)	ヨコ型(機能重視)
組織の構造	階層型(使従関係)	対等型(契約関係)
人材の質	多重化(標準化)	多様化(自由化)
意思の決定	全会一致	多数決

【復習】伽藍とバザール (1/2)

伽藍というのは、お寺のお堂とか教会の聖堂のように、壁に囲まれた閉鎖的な場所だ。それに対してバザールは、誰でも自由に商品売り買いできる開放的な空間をいう。そして、伽藍とバザールかによって同じひとでも行動の仕方が変わる。

バザールの特徴は、参入も退出も自由なことだ。商売に失敗して、「なんだ、あいつ口ばっかでぜんぜんダメじゃないか」といわれたら、さっさと店を畳んで別の場所を出直せばいい。

その代わりに、バザールでは誰でも商売を始められるわけだから(参入障壁がない)、ライバルはものすごく多い。ふつうに商品売っているだけでは、どんどんじり貧になるばかりだ。

これがゲームの基本ルールだとすると、どういう戦略がいちばん有効だろうか。それは、「失敗を恐れず、ライバルに差をつけるような大胆なことに挑戦して、一発当てる」だ。もちろん、運よく成功するより挑戦に失敗することの方がずっと多いだろう。でも、そんなことを気にする必要はない。バザールでは、悪評はいつでもリセットできるからだ。

これを言い換えると、バザールの必勝戦略は「よい評判(「あの店、美味しいよね」「あそこがいちばん安いよ)」をたくさん集めること」になる。だからこれを、「ポジティブゲーム」と呼ぼう。

(次頁につづく)

『人生は攻略できる』(2019.03.06 橋 玲)より

【復習】伽藍とバザール (2/2)

それに対して伽藍の特徴は、参入が制限されていて、よほどのことがないと退出できないことだ。このような閉鎖空間だと、ちょっとした悪口(「あそこの店主、態度悪いよな」)が消えないままずっとつづくことになる。

その代わりに、新しいライバルが現れることはないだろうから、競争率はものすごく低い。どこでもある商品をふつうに売っているだけで、とりあえずお客さんが来て商売が成り立つ。

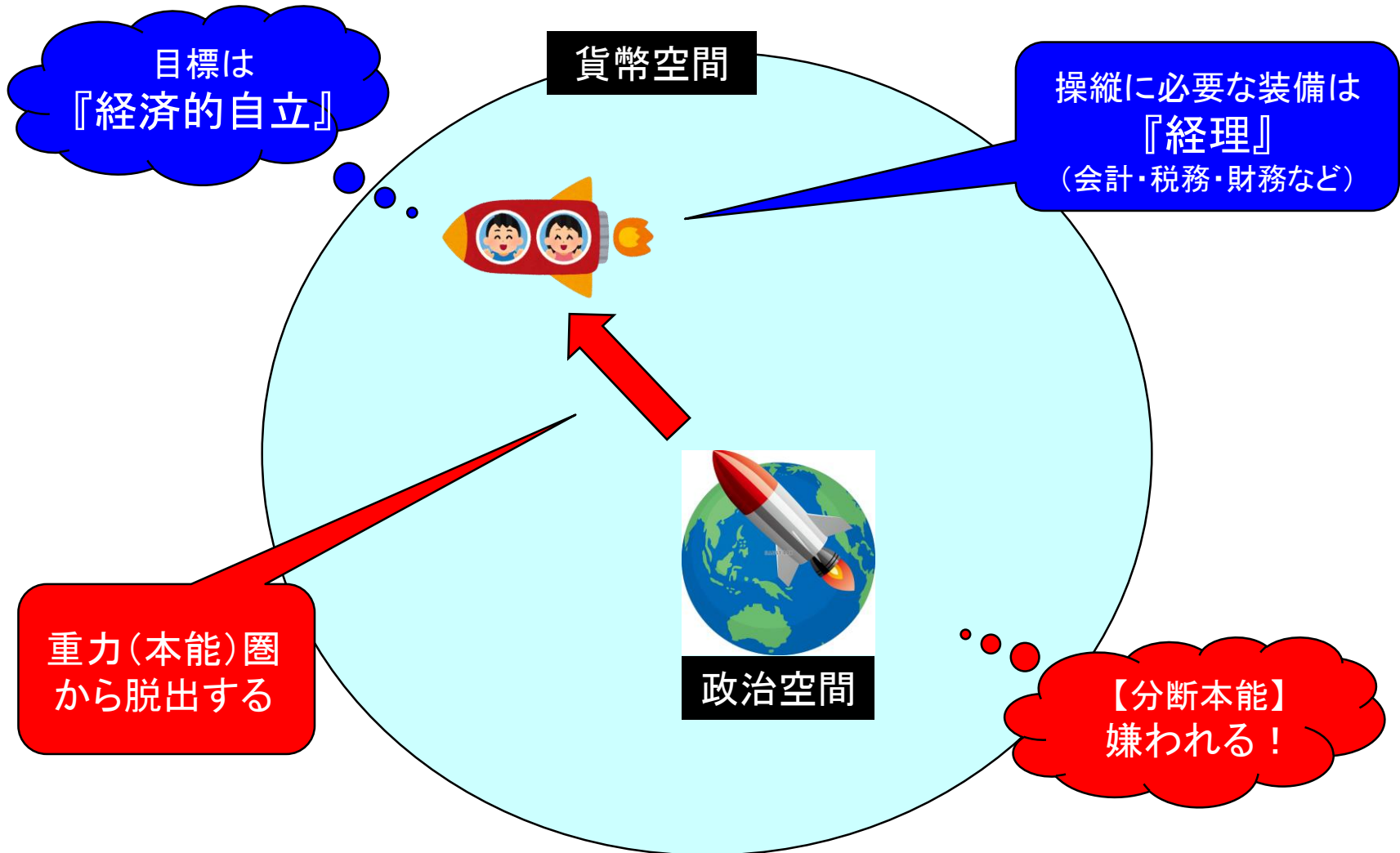
これがゲームの基本ルールだとすると、どういう戦略が最適だろうか。それは、「失敗するようリスクはとらず、目立つことはいっさいしない」だ。なぜなら、いちどついた悪い評判は二度と消えないのだから。

このように、伽藍の必勝戦略は「悪い評判(失敗)」をできるだけなくすことになる。こちらは「ネガティブゲーム」だ。

ここで強調しておきたいのは、ポジティブになるかネガティブになるかは、そのひとの個性とはまったく関係ないということだ。ふだんはポジティブなひとでも、伽藍に放り込まればネガティブゲームをするようになる。同様にいつもはネガティブなひとでも、バザールではポジティブゲームをする。なぜならそれが、生き延びるための唯一の方法だから。

『人生は攻略できる』(2019.03.06 橋 玲)より

【復習】 「分断本能」からの脱出



【復習】進化によるプログラム（分断本能）

私たちは、人生というゲームのなかで、自分が所属する集団で役割(キャラ)を確保し、できるだけ目立とうとすることと、自分たちの集団を敵対する集団より優位に置こうとすることを進化によって“プログラミング”されています。

私たちがなぜこんな複雑なゲームをするかという、敵対集団に敗れば皆殺しにされてしまうし、集団のなかで目立てなければ異性を獲得できないからです。

いったん「集団」ができると、こんどは集団同士で合従連衡が始まります。

敵対する集団と自分たちの集団を差別化し、敵の敵とは連合を組み、相手の集団を征服して勢力を拡大する …… 戦国時代からヤクザ、政治家、会社内の派閥抗争に至るまで、歴史をさかのぼれば旧石器時代から、あるいはチンパンジーと分岐する前から、ヒトはえんえんと同じゲームを繰り返してきました。

『幸福の「資本」論』（2017.06.14 橋 玲）より

コップ。半分の水

悪い！

半分しか
残っていない

よくなっている！

半分も
残っている



進化によるプログラム（ネガティブ本能）

水の入ったコップを見て「半分しかない」と思うか、「半分も残っている」と思うかは主観の問題ですが、心理的な効果は大きくことになります。

生き物の進化の歴史を考えるならば、私たちがつねに悲観的（ネガティブ）にものごとを見るように「設計」されていることは明らかです。肉食獣がうようよいるサバンナで、天気がいいからとのんびり日光浴を楽しむような原始人は真っ先に死に絶えてしまったでしょう。

とはいえ石器時代より格段に安全になった現代社会で、同じようにびくびくしながら生きる必要はありません。こころのネガティブな本性を考えれば、楽観的すぎるくらいの方がちょうどいいのです。

『事実 VS 本能』（2019.07.31 橘玲）より

遺伝子によって未来はわかる？ (1/2)

セロトニンを運搬する遺伝子には S型とL型があることがわかっています。

この遺伝子が組み合わされて、「SS」「SL」「LL」という3つの遺伝子型が決まるのですが、オックスフォード大学感情神経科学センターのエレーヌ・フォックスは、そのタイプのちがいが性格に大きな影響を与えているのではないかと考えました。

そこでフォックスは、恋人同士が抱き合っている「ポジティブ」な画像と、女性が後ろから羽交い絞めにされ、首にナイフを当てられている「ネガティブ」な画像を用意し、それを被験者に同時に見せて、セロトニン運搬遺伝子の型によって注意バイアスがどう変わるかを調べてみました。

すると、LL型の遺伝子の保有者はポジティブな画像に引かれやすく、SS型もしくはSL型の遺伝子の保有者はネガティブな画像に注意を向けやすいことがわかったのです。

(次頁につづく)

『幸福の「資本」論』(2017.06.14 橋 玲)より

遺伝子によって未来はわかる？ (2/2)

この実験結果は、LL型の遺伝子を持つひとがなにごとにも前向きな(ポジティブな)性格で、SS型やSL型はものごとの暗い側面ばかりに目がいき、いつもびくびくして不安に脅えている(ネガティブな)性格であることを示唆しています。

そしてこのセロトニン運搬遺伝子の型は、人種によって大きく異なることがわかっています。

傾向としてはアフリカ人にLL型が多く、白人、アジア系と少なくなります。とりわけ日本人はS型の保有率が欧米人に比べて5割も多く、LL型保有者は3%と世界でもっとも少ないのです。

すなわち日本人の97%がSL型かSS型で、脳内のセロトニン発現量が少なく、ネガティブなことに対して強い注意バイパスを持っています。これがメランコリー親和型の性格をつくり、うつを日本の「風土病」にしているのかもしれません。

『幸福の「資本」論』(2017.06.14 橋 玲)より

ネガティブ本能の罠

楽天主義、もしくは楽観主義。具体的に楽観主義を使って例文を作ってみよう。

「彼はこの前の模擬試験で志望校の判定がEでしたが、『E判定はいい判定だ』と言って、おれは頑張れば大丈夫だろうと言った。根拠のない楽観主義を持っている』とかね。

楽観主義とは「うまくいくだろうと思うこと」ね。では楽観の反対はなに？

そう。悲観主義。

この『道徳的人間と非道徳的社会』は邦訳も出版されている。個人としていい人であっても、社会構造が悪い状態では悪い人になってしまうという考え方が書かれているんだ。

たとえば、海賊船を考えてみよう。海賊船は掠奪などの悪いことをしているわけだけど、そこで自分の仕事に従事している人はいい人かもしれない。一生懸命仕事をする人であればあるほど、いい人であればあるほど、海賊行為に加担することになるというわけだ。

全体の構造のなかで考えると、その人は悪いことに加担していることになる。こういう構造に目を向けろと唱えた本です。

『16歳のデモクラシー』（2020.01.25 佐藤 優）より

「理想主義」と「現実主義」

アメリカの外交を考える時、二つの考え方がある。一つは理想主義。自由や民主主義の理想をみんなが持つべきだ考える。そうすると、北朝鮮なんかどう？自由とか民主主義の国かな？

人権の基準や、自由や民主主義に照らしておかしい。理想主義に立つと、そんなおかしいことをしている外国をどうするだろうか。

圧力をかけて変えさせる。状況によっては軍隊を送ってそういう政権をつぶす。これが理想主義の考え方だ。自分たちの価値観でやりましょと、圧力をかけるんだね。

これに対して「現実主義」とはなにか。北朝鮮のように原爆やミサイルを勝手に作っている国があるよね。それをつぶそうと思ったら戦争になって、何百万人も人が死ぬ。国内では人権弾圧をしている国であっても、核兵器さえ作らなければいい。仲良くして、棲み分けをしましょと考える。こういうのが現実主義だ。

アメリカの外交においては、理想主義と現実主義の考え方が両方ある。伝統的には、理想主義が民主党、現実主義が共和党、という分け方ができる。

『16歳のデモクラシー』（2020.01.25 佐藤 優）より

「原罪」の考え方（1/2）

ヨーロッパにおいては、どんなにいい人でも生まれながらにして罪をもっていると考える。罪は、それが形になると「悪」になる。悪が人格化すると「悪魔」になる。だから悪魔は欧米の人にとって実際にいるものなんだ。

悪が人格化していると「悪魔」なのだから、欧米人の中に「悪魔」はごく普通にいる。悪魔がいるのであれば倒さなければいけない。

このように、人間は絶対的に正しい存在ではない、という考えがキリスト教には埋め込まれてきた。けれども、近代になり、世俗化するにしたがって、絶対に正しいことはある、人間の理性は絶対に信用できる、理性の通りに理想的な社会ができて、人類は発展するだろうと考えるようになってきた。

その考え方が崩れてしまうきっかけになったのが、1914年の第一次世界大戦です。

第一次世界大戦まで、人類は理性の力で理想的な社会をつくれるだろうと思っていた。ところが、第一次世界大戦が起きてしまうと、大量破壊と大量殺戮が起きた。人間の理性は信用することができなかった。そう考えたとき、もう一度「原罪」の考え方を見直さなければならないという機運が、哲学や思想、宗教においてものすごく強くなったんだ。

（次頁につづく）

『16歳のデモクラシー』（2020.01.25 佐藤 優）より

「原罪」の考え方 (2/2)

今までは「正義は勝つ」「善意はわかってもらえる」「話せばわかる」と考えていた。

しかし人間には「自分が有名になりたい」だとか、「自分の利益を追求したい」という気持ちもある。そういった人間にもともとある「原罪」を見過ごしてしまったから、ナチスのようなものができたのだとニーバーは言っている。

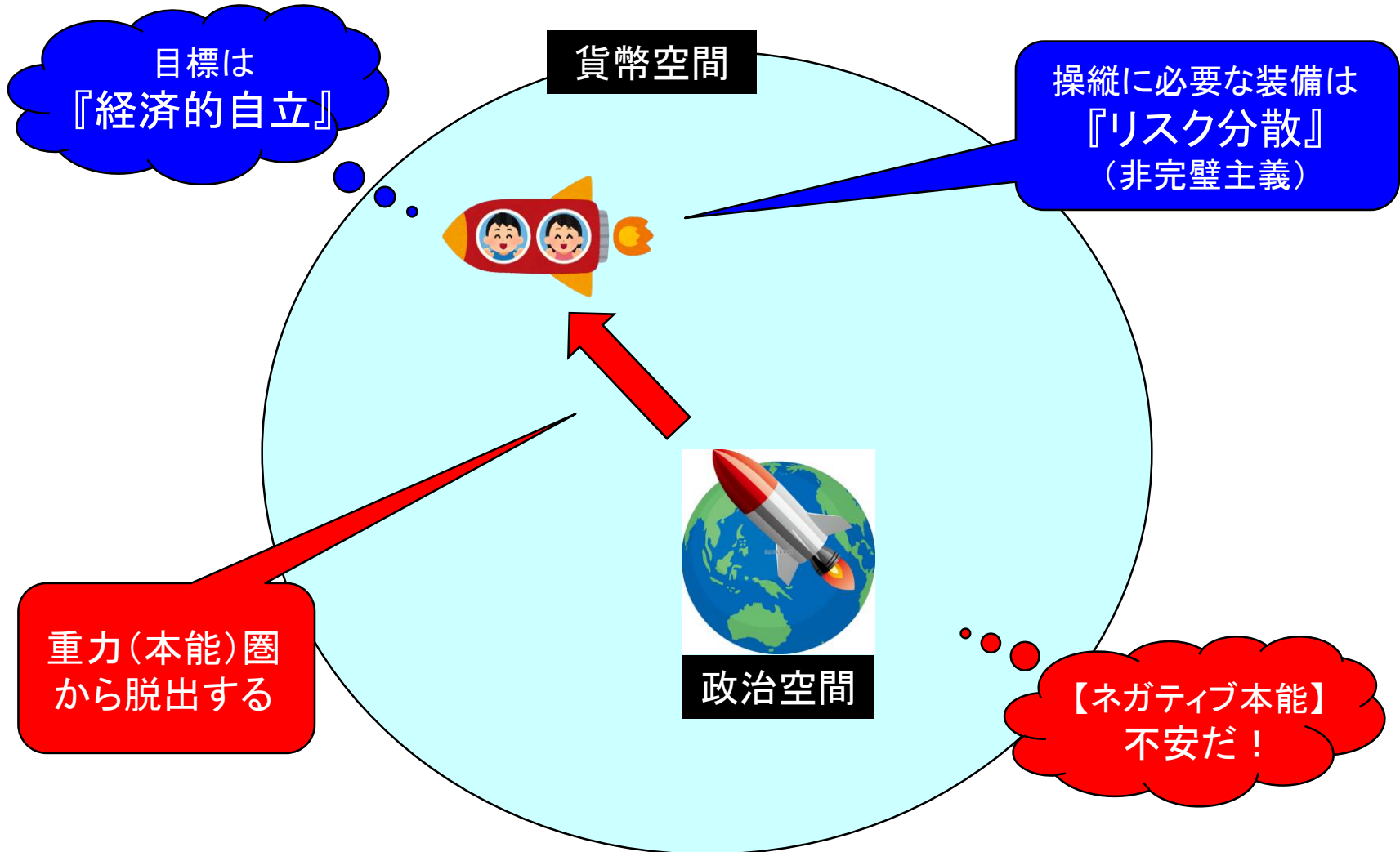
人間は権力を得ようとする。権力とはなにか。相手の意思に反することでも、実行させることができる力のことだ。人を支配するのが、権力の本質だ。

人間は人を支配したい、上に立ちたいという気持ちを持っていて、それは人間の原罪から来るんだよね。力があればあるほど、能力があればあるほど、秘めた野望がある。

それをいかに自覚して抑えるか、むき出しにするか、あるいは隠しながら巧みに実現していくか。いろんなタイプの人がいる。

『16歳のデモクラシー』(2020.01.25 佐藤 優)より

「ネガティブ本能」からの脱出



「伽藍」から「バザール」へ

オーストラリア人の若い友人と話をしている、日本企業の年功序列と終身雇用の説明をしたら、彼は「Scary(おぞましい)」といました。

あなたがもし就活を控えた大学生なら、「安定した大きな会社」はじつはもっともハイリスクな選択かもしれません。いったん伽藍の世界に取り込まれてしまうと、40歳(あるいは35歳)の転職可能年齢を超えると人的資本が会社のリスクと一体化してしまい、どれほど理不尽な状況になってもそこから逃れることができなくなってしまふからです。

そんな暗たんとした未来に比べれば、たとえ不安定に見えたとしても、汎用的な知識、技能、職歴、資格を獲得できる仕事のほうがずっとマシです。外資系やベンチャー企業だけではなく、中小企業でも、探してみればそうした機会はいくらでも見つかるでしょう。

そもそも「適職」などというものは、実際に仕事をしてみなければわかりません。そう考えれば、自分のキャリアをひとつの会社に限定するのではなく、転職を前提として、もっとも得意なこと(向いていること)を探すほうがずっと効率的です。

「会社」に人的資本のすべてを預けることはきわめてハイリスクな人生設計です。この残酷な世界を生き延びるには、伽藍を抜け出してバザールへと向かうことで、極大化した人的資本のリスクを分散しなければなりません。

『大震災の後で人生について語るということ』(2011.07.29 橋 玲)より